

マイモニデスの遍歴 —その著作に与えた影響—

神田 愛子

同志社大学大学院神学研究科博士後期課程

要旨

12世紀のユダヤ思想家マイモニデス（1138-1204）は、スペインのコルドバでラビの家系に生まれ育った。当時この地域はムワッヒド朝（1130-1269）下にあり、迫害を逃れるため一家はアンダルス南部と北アフリカを流転、モロッコのフェズ、イスラエルの港町アッコを経てカイロ旧市街フスタートに定住、自身はアイユーブ朝（1171-1250）の宮廷医となる。彼の著作には、アンダルス時代の『論理学』（*Maqāla fī ṣināʿat al-manṭiq*）や、ユダヤ暦に関する『置閏法』（*Maʿamar ha-ʿibbur*, 1157/1158）、転居後に執筆した『ミシュナー註解』（*Pirush ha-mishnayot*, 1161-1168）、『イエメン書簡』（*Iggeret Teman*, 1172）、『ミシュネー・トーラー』（*Mishneh Torah*, 1168-1177）、また哲学的著作『迷える者の手引き』（*Dalālat al-ḥāʾirīn*, 1185-1191）、『復活論』（*Maʿamar tehiyyat ha-metim*, 1191）の他、地中海沿岸のユダヤ共同体に書き送ったレスポンサや書簡が残存している。イスラーム王朝興亡の只中において、ユダヤ人のラビとして、またイスラーム王朝の宮廷医として、彼の遍歴が彼の著作にどう反映したのかを、『イエメン書簡』を中心に考察する。

キーワード

マイモニデス、遍歴、アンダルス、強制改宗、イエメン書簡

Maimonides' Biography: Influences on his Works

Aiko KANDA

Doctoral Student

Graduate School of Theology, Doshisha University

Abstract

Moses Maimonides was born and grew up in Cordoba, Spain. At that time, Al-Andalus was under the control of the Almohad (1130-1269). Maimonides' family moved around Southern Spain and North Africa, through Fez and Acre, and finally settled in Fustat. He became a physician of the Ayyubid (1171-1250). His works include *Treatise on the Art of Logic* (*Maqāla fī šinā'at al-mantiq*) and *On the Jewish Calendar* (*Ma'amar ha-`ibbur*, 1157/1158), written during his stay in Al-Andalus; *Commentary on the Mishnar* (*Pirush ha-mishnayot*, 1161-1168), *Epistle to Yemen* (*Iggeret Teman*, 1172), and *Mishneh Torah* (*Mishneh Torah*, 1168-1177) written after he settled in Fustat. His philosophical works include *The Guide of the Perplexed* (*Dalālat al-hā'irīn*, 1185-1191) and *The Treatise on Resurrection* (*Ma'amar tehiyyat ha-metim*, 1191). Other works of Maimonides are responsa and epistles sent to the Jewish communities in the Mediterranean region. This essay will examine how his biography and the socio-political environment affected his works, in particular, *Epistle to Yemen*.

Keywords

Maimonides, Peregrination, Al-Andalus, Forced Conversion, *Epistle to Yemen*

1. 序論

モーセス・マイモニデス (Moses Maimonides; ユダヤ名 Moshe ben Maimon, 通称 Rambam, 1138-1204) は、ラビ・マイモン (Maimon ben Joseph, 1110 頃-1166 頃) の長男として 1138 年にスペイン・アンダルス地方のコルドバに生まれた¹。900 年から 1200 年にかけて、イスラーム世界は文化的に最も成熟した時期にあった。756 年にコルドバを首都とした後ウマイヤ朝 (756-1031) が成立、続くイベリア半島の群小王国の時代 (タイファ、muluk al-tawa'if; 1031-1091) には各王国が自治権を獲得、商業だけでなく、芸術、文学、科学等あらゆる分野でイスラーム文明が花開いた。ギリシアの古典文献がアラビア語に翻訳されたことで文化および学問の繁栄にも大きく貢献し、この時代は「イスラームのルネサンス」とも呼ばれている。この時期はユダヤ文化においても黄金時代とされ、スーラのタルムード学院のガオンであったアムラムが編纂した祈祷書 (*Seder Rav Amram*, 860 頃) や、サーディアの祈祷書 (*Siddur*, 940 頃) の成立により礼拝の統一化が進み、マイモニデスの『ミシュネー・トーラー』 (*Mishneh Torah*, 1168-1177) の完成によってユダヤ口伝律法の法典化がなされた時代でもあった²。

一方、この時期はヨーロッパ全域においては波乱と激動の時代であった。9 世紀以降、スカンディナビア原住民のヴァイキングが南下、フランス北西部にノルマンディー公国 (911-1204) を、イギリスにデーン朝 (1016-1066) とノルマン朝 (1066-1154) を、そして南イタリアにはシチリア王国 (1130-1816, ノルマン人の支配は 1061-1250 頃) を築いた³。1054 年にはコンスタンティノープル総主教とローマ教皇が相互に破門し合ったことで東のギリシア正教と西のローマ・カトリックにキリスト教会が分裂、さらにローマ教皇と神聖ローマ皇帝の叙任権闘争 (1076-1122) では、グレゴリウス 7 世が教皇権の優位を主張するに至った。このローマ教皇の権力拡大を背景に、教皇ウルバヌス 2 世の呼びかけで、聖地エルサレム奪還を名目に第 1 回十字軍 (1096-1099) が派遣された。

こうしたヨーロッパのキリスト教会を背景にした出来事は当然イベリア半島にも波及する。1040 年に建設されたムラービト朝 (1040-1147、首都マラケシュ) はアンダルスに勢力を拡大、最盛期にはサラゴサにまで版図を広げた。マリック法学派のムラービト朝に対し、イスラーム改革運動を基盤にマフディー (救済者) を自任するベルベル人のイブン・トゥーマルトが起こしたムワッヒド朝 (1130-1269) がマラケシュを占拠 (1147)、ムラービト朝を滅ぼしたのち、1157 年にはアンダルス全域を征服する。「タウヒード (神の唯一性) の徒」を名乗る彼らが他宗教に寛容なはずはなく、キリスト教勢力とイスラーム勢力の狭間にあったユダヤ人はレコンキスタ (再征服運動、718-1492) の影響も受け迫害を被った。ムワッヒド朝はユダヤ人だけでなくキリスト教徒にもイスラームへの改宗を迫り、

イベリア半島での迫害はのちにイエメンのユダヤ人迫害へと飛び火することになる⁴。

こうした時代を背景に、ユダヤ人の中にはメシア待望の気運が高まり、終末の日を予言する者や偽メシアまで現れ、次第にユダヤ共同体は弱体化していった。こうした中、マイモニデスより 60 年ほど前にトレドで生れたイェフダ・ハレヴィ (Judah Halevi, 1075 頃-1141) は、強大な二つの世界宗教のイスラームとキリスト教に挟まれ、蔑まれたユダヤ教弁護のために『クザリ』(*Kitāb al-khazari*, 1130-1140) を執筆、非ユダヤ教徒に対しユダヤの教えを弁護しただけでなく、哲学に感化された同時代の同胞知識人にも警鐘を鳴らし、哲学の神ではなくユダヤの神を信じるよう訴えた⁵。本章で概観したとおり、マイモニデスが生きた社会的かつ政治的状况は波乱に富んだものであった。第 2 章では、彼がいつ、どのような状況下で著作を記したのかを彼の遍歴に沿って検証する。第 3 章では、彼がイエメンのユダヤ共同体に送った『イエメン書簡』に基づき、彼の遍歴が彼の著作に具体的にどのように反映したかについて考察する。

2. マイモニデスの生涯と当時の社会状況

2-1. アンダルスにて⁶

冒頭で書いたように、マイモニデスは 1138 年にヨセフの子ラビ・マイモンの長男としてラビの家系の一員としてコルドバで生まれた。父親に関しては彼の記述が残っているが、母親については史料が残されてないため、ほとんど知られていない。マイモニデスの孫ダビデの記述によると、彼はニサン月の 14 日、過越祭の前日に生まれている。贖いの祭日前夜に生まれたことには、象徴的な意味があると捉えられている⁷。

ユダヤ人がコルドバに居住するようになったのは、第二神殿の崩壊 (70 年) 以降とされている⁸。後ウマイヤ朝のアブド・アッラフマーン 3 世 (在位 912-961) は、三宗教が混在するイベリア半島の宗教共同体を統合し、スペインのイスラーム王朝最盛期を築いた。ムスリムは支配階級のアラブ人、多数派のベルベル人、キリスト教から改宗したムワッラードゥーン (*muwallādūn*) により構成され、キリスト教徒は、イベリア半島に西ゴート王国 (415-711) を建設したゲルマン人の子孫でアラブ化したモサラベ (*Mozarab*) と中東からの移住者、経済的繁栄に惹かれてイベリア半島北部やピレネー山脈以北、マグリブからの移住民により構成された。アンダルスにはイベリア半島西部に住むアストゥリアス人、北東部のカタルーニャ人、北西部のバスク人、スラブ人、中央アフリカから奴隷として連れて来られた者もいて、多数の民族が混在して居住していた。このため宗教的対立

よりも、支配階層であるムスリムと宮廷に勤めるキリスト教徒とユダヤ教徒らの教育を受けた富裕層と、下層民との隔たりの方が大きかった⁹。

後ウマイヤ朝から群小王国時代にかけて小規模な内乱で収まっていたイベリア半島も、十字軍派遣による、いわゆるレコンキスタの活性化により次第に安定を失っていった。この徐々に不安定になりつつあった時代にアンダルスに生まれ育ったのがマイモニデスである。ベルベル人の国であるムラービト朝から、政治的に過激な思想を持ったムワッヒド朝に代わった頃にマイモニデスは生まれた。マフディーを自任するムワッヒド朝の指導者は、彼らに不従順とみなしたムスリムさえも弾圧した。キリスト教徒やユダヤ人は不信心者とされ、イスラームに改宗しなければ亡命しか選択肢がなかった。教会やシナゴグは破壊され、ユダヤ人は差別的印を身につけることを余儀なくされた¹⁰。この悲惨な状況を、彼の父マイモンはイスラームに改宗したユダヤ人に宛てて書いた『慰めの書簡』(*Iggeret ha-nehamah*, 1159/60)の中で記しており、イスラームは偶像崇拜的ではなく、神を信じることでユダヤ教徒であり続けることができると同胞を励ましている¹¹。

結局、強制改宗から逃れるため、多くのユダヤ人がアンダルスから去っていった。『迷える者の手引き』(*Dalālat al-hā'irīn*, 1185-1191)をユダヤ・アラビア語からヘブライ語に翻訳したイブン・ティボン (*Ibn Tibbon*, 1150 頃-1230 頃) はフランス南東部のプロヴァンスへ、文法学をはじめ様々な学問に秀でたアブラハム・イブン・エズラ (*Abraham Ibn Ezra*, 1089-1164) は北アフリカを経てイタリア、フランス、果てはイングランドにまで足跡を残した。12世紀のトレドはアラビア語文献をラテン語に翻訳する中心地であったため、キリスト教徒が支配するヨーロッパ各地へ亡命したユダヤ人が、アンダルスの当時最先端であった学問をヨーロッパに伝える役目を果たすことになった¹²。

一方、マイモニデスの一家はコルドバからは離れたものの、彼が20歳になるまではアンダルスに留まったと見られる。ユダヤ人にとってタルムードの学習は必須であるが、タルムード学の中心地はバビロニアのスーラとプンベディタから、10世紀にはコルドバ南方にあるルセーナに移っていた。ルセーナの学院はマイモニデスがタルムードを学び始める頃には閉校していたが、彼の父はここで学んでいる。マイモニデスはアンダルスでまずラビ・ユダヤ教を学び、次に数学、論理学、天文学、自然学を学んだ。論理学はファーラービー (*al-Fārābī*, 850 頃-950) のテキストに沿って学んだと見られる。当時、哲学の学びはトーラーの学習に有害だとするラビの意見が主流だったが、正確な暦を作るために数学と天文学は有益とされていた。学生たちは学問の大半をギリシア語からアラビア語に翻訳された文献に基づき学んでいたが、哲学はアリストテレスとその註解書、解釈を施されたプラトンや新プラトン主義の著作、科学はユークリッド、プトレマイオス、

ガレノスらの文献を使ったと推測されている¹³。この頃、マイモニデスは『論理学』(*Maqāla fī ṣinā'at al-mantiq*)、ユダヤ暦に関する『置閏法』(*Ma'amar ha-'ibbur*)、また部分的にはあるが、バビロニア・タルムードの註解を書いている¹⁴。当時、彼が受けた教育に基づき書かれたと推測されよう。

2-2. フェズにて

1160年頃、マイモニデスの一家はモロッコのフェズに向けジブラルタル海峡を渡って行った。なぜヨーロッパではなく、アフリカに移ったのかはわかっていない。アンダルスと相似た文化を共有するマグリブの方が住み易いと考えたのか、あるいは地理的に近い土地を選んだのかもしれない¹⁵。マイモニデスは医者としても名声を博したが、当時、医学を専門に教える学校はなく、ペルシアのイブン・スィナー (Ibn Sīnā, 980-1037) のように独学で医学を学んだ者もいたが、多くはセビアのイブン・ズフル (Ibn Zuhr, 1094-1162) のように医師を家業としていた。マイモニデスがどのように医学を学んだのか詳しくは知られていないが、彼自身の記述によると医師の下で医術を学んだらしい。フェズにはカラウィーン学院 (al-Qarawīyīn, 859-) というモスクに併設された最古の大学があり、その図書館には現在に至るまで貴重な文献が所蔵されている。マイモニデスはイブン・ズフルの医学書から学んでおり、彼の肉体と魂についての考え方に感化されたと見られる¹⁶。

ムワッヒド朝の異端や異教徒に対する迫害の酷さは前節で述べたが、第二代のアブー=ヤアクブ・ユースフ 1 世 (Abū Ya'qūb Yūsuf I, 在位 1163-1184) の時代にはその度合いが一層強まった。歴史家アブドゥルワーヒダル・マッラークシ ('Abd al-Wāhid al-Marrākushi, d. 1185) の記述によると、この時期は差別的法制が布かれ、ユダヤ人はムスリムとして生活するよう強制され、シナゴークが破壊された上、外見はユダヤ人とわかるよう暗色で丈の長い上着と見栄えの悪い帽子といった、規定の衣服の着用を強要されたという。こうして、多くのユダヤ人は恐怖からイスラームへの改宗を余儀なくされ、ユダヤ共同体は壊滅の危機に曝されることとなった¹⁷。

マイモニデスはこの頃から『ミシュナー註解』(ヘブライ語: *Pirush ha-mishnayot*、アラビア語: *Kitāb al-sirāj* (光の書)、1161-1167/68) の執筆を始めたが、アッコへの移住前に書き上げたのが『強制改宗に関する書簡』(*Iggeret ha-Shemad*, 1165 頃)¹⁸である。当時、「殺されないためにイスラームの信仰告白 (*shahāda*) をすべきか、殺されても信仰告白を拒否すべきか」という質問に、「ムハンマドはアッラーの使徒であると告白する者は誰でも、イスラエルの主である神を拒絶している」とした著者不明のレスポンスが流布し、その反論として書かれたのがこの書簡で

ある。原本はアラビア語で書かれたが、ヘブライ語写本しか残存していない。アラビア語原本が残っていないのは、ムスリムの役人に見つかることを恐れてのことであろう。彼は書簡の中で父マイモンと同様、イスラームへの改宗は許容されることであり、迫害に耐えて殉教するよりも、礼拝実践が可能な地域へ亡命するよう同胞に勧めている¹⁹。彼自身が同じ状況に置かれたからこそ、死よりも生き続けるよう訴えたと考えられる。

2-3. アッコにて

結局、マイモニデス一家は迫害から逃れるためフェズを去り、1165年にイスラエルの港町アッコへ向かった²⁰。アッコを次の居住地としたのは、当時一家が貿易で生計を立てていたからであろう。ムスリムの旅行家イブン・ジュバイル (Ibn Jubayr, 1145-1217) は、アッコはムスリムとキリスト教徒の貿易商が行交う地で、コンスタンティノーブルに比すほど大きな町だと記している²¹。この地は当時十字軍の勝利により建設されたエルサレム王国 (Regnum Hierosolymitanum, 1099-1291) の支配下にあり、大きな柱の建造物が多く建てられていた。イスラーム王朝支配下のアンダルスから来たマイモニデスには、キリスト教徒が闊歩するアッコの光景は驚愕するものだったと考えられる。しかし、活気あふれるこの地は、落ち着いて学問する場とは言えなかった²²。

マイモニデスは、父と弟ダビデと共にエルサレムに四日間巡礼に訪れたことを記している²³。当時、エルサレムはキリスト教徒の支配下にあり、ユダヤ人の滞在は商用と巡礼に限定され居住は禁止されていたことから、決して安全な地ではなかったと思われる²⁴。彼らはエルサレム訪問の後、父祖アブラハムの墓のあるヘブロンを訪れている²⁵。一家はアッコに約一年間滞在した後、最後の居住地となるエジプトへと旅立った。

2-4. フスタートにて

1166年、一家はエジプトのアレクサンドリアに到着した。マイモニデスが28歳の時である。エジプトは当時地中海貿易の中心地であり、多くのユダヤ人が居住していた。貿易には最適地であったが、律法はイスラエルの民がエジプトに再度居住することを禁じており²⁶、彼がなぜエジプトに定住することになったかは不明である²⁷。彼は当初、この地を終の棲家にするとは考えていなかったのかもしれない。当時、エジプトは新都カイロを首都とし、他宗教に比較的寛容なファティマ朝 (909-1171) の支配下にあった。アレクサンドリアにはユダヤ人を含めマグリブからの移民が多く住んでいたが、シチリア王国のルッジェーロ2世がスナ派の多いチュニジアを1148年に一時征服し、さらにムワッヒド朝が北アフリ

カ全域を支配して以降、移民は急増した。一家が定住することになったカイロ旧市街のフスタートは、別名ローマ人地区（Qaṣr al-Rūm）とも呼ばれ、キリスト教徒が多い町であった。フスタートは正統カリフ時代の641年に建てられた歴史のある町だが、ナイル川経由での上エジプト交易の中心拠点でもあった。一家は富裕層が多いマムスーサ地区に居を構えたが、そこにはキリスト教徒、特にイスラーム化以前から、単性説²⁸を採るエジプトのコプトとシリアのメルキトが居住していた。フスタートには三つのユダヤ人共同体—カライ派、バビロニアとパレスチナ出身者の共同体—が存在したが、マイモニデス自身はバビロニア典礼に従っていたものの、特定のシナゴグには属さなかったようである²⁹。彼の父はこの頃亡くなったと見られる³⁰。

マイモニデスがいつからエジプトで医師として働き始めたかは知られていないが、伝記作家のキフティ（Ibn al-Qifṭī, 1172-1248）の記述（1165-1171頃）に「彼はアシュケロンのフランク王の侍医になることを拒否した」とあり、時期的にこれはエルサレム王アモーリー1世（Amalric I, 在位 1162-1174）のことと考えられる³¹。彼がなぜこの要請を拒絶したのかはわからないが、十字軍の侵入で多くのユダヤ人が捕虜になったことが影響したのかもしれない³²。とはいえ、侍医の要請があったということは、それだけ当時から彼は医師として評判が高かったと推測される。

一家が移住した時期はファーティマ朝の統治下であったが、その数年後にはアイユーブ朝の支配に代わった。マイモニデスはファーディル（al-Qādī al-Fāḍil, 1131-1199）という庇護者を得たが、ファーディルはファーティマ朝の宰相になったサラディン（Ṣalāḥ al-Dīn, 1138-1193）に仕えていたため、サラディンが1171年にアイユーブ朝（1171-1341）を建てた後も、引き続きサラディンの側近であった。同年、マイモニデスはユダヤ人の首長（Raʿīs al-Yahūd³³あるいは Nagid, 在位 1171-1173）となるが、これはファーディルを通してアイユーブ朝に仕えることでもあった。ファーディルは富裕な商人、医者、また裁判官であり、ユダヤ人共同体に対する影響力を保持していた。アイユーブ朝は政権安定のためマイモニデスの力を必要とし、マイモニデスとファーディルも商売のため互いの力が必要であった。ただ、彼が晩年、ファーディルのために書いた『毒物と解毒剤』（*Fi al-sumūm wa al-mutaharraz*, 1198）の謝辞から知れるように、相互の利益を超えた友情と尊敬の念が二人の間にはあったようである³⁴。

マイモニデスはアイユーブ朝の宮廷医としても招聘された。彼の息子アブラハムとカイロの病院で同僚だった医師で歴史家のイブン・アビー・ウサイビア（Ibn Abī Uṣaibiʿa, 1194-1270）は、マイモニデスはサラディンの侍医であったと記している。クレマーは、サラディンが1182年以降シリアでの戦いのためエジプトに

戻っていないことから、マイモニデスが侍医になったのはそれ以前の時期であり、ユダヤ人の首長となった彼が侍医になるのは当時の時代状況から考え不自然ではないことから、侍医になったのは 1171 年頃であろうと推測している³⁵。マイモニデスは晩年、サラディンの息子アフダル (al-Afdal Nūr al-Dīn ‘Alī, 1169-1225) のために『健康の保ち方』(*Fī tadbīr al-ṣiḥḥa*, 1198) と『発作の原因について』(*Fī bayan al-a‘rad*, 1200) を、またサラディンの甥のために『喘息について』(*Fī al-rabw*, 1190 頃) と『交接について』(*Fī al-jimā‘*) を記しているが³⁶、これは彼が侍医としてアイユーブ朝の厚い信頼を得ていたことを示していよう。

エジプトで社会的に高い地位を得たマイモニデスは執筆の方も快調に進んだようで、『ミシュネー・トーラー』に先立ち記した『戒律の書』(*Sefer ha-mitzvot*, 1168-1170) を書き上げたのがこの頃である。彼の代表作『ミシュネー・トーラー』(全 14 巻) の執筆も開始、ラビとして最も充実した時期であったと言えよう。彼はユダヤ人の首長として迫害の最中にある同胞に宛て『イエメン書簡』(*Iggeret Teman*, 1172) を書き送っているが、これは彼自身の実体験を反映したものであったと考えられる。

さて、ここで彼がいつ結婚したかにつき言及しておきたい。結婚は、ユダヤ人社会において社会的に安定した生活を送るため最も大切なことのひとつである。彼がいつ結婚したかは文書に書かれていないため不明であるが、弟子のヨセフに宛てた手紙から、1173 年頃、すなわち彼が 35 歳頃のことであったと推測される。夫人の名前は記されていないが、役人で医者でもあったイザヤの子ミシャエル (Mishael ben Isaiah) の娘であった³⁷。家庭を築いた彼にとって、執筆に専念できたこの時期は、最も幸福な時期であったと思われる。

順調に見えたマイモニデスの人生であったが、その数年後、彼は生涯で最も大きな試練に見舞われる。彼の弟ダビデが、商用でのインドへの航海の途上、船が難破して亡くなったのである。彼は、アッコの知人であるヤペテ (Japheth ben Elijah) に宛てた手紙に次のように綴っている。

凶報が届いてから一年もの間、私はひどい熱と精神の混乱のため床に力なく横たわり、死んだも同然の状態であった。それから今日までの八年間、絶望的な喪の状態にいる。いかにして慰められ得ようか。彼は私の息子であった。私の膝上で成長したのだから。彼は私の弟であり、教え子だった。私が安全に過ごす間、商売をして生計を立てたのは彼だったのだ³⁸。

この手紙は 1185 年に書かれたものだが、1177 年に『ミシュネー・トーラー』を書きあげてから 8 年もの間、彼の執筆活動は完全に止まってしまった。弟の死

の衝撃があまりにも大きかったのであろう。彼がいかにして立ち直ったのかはわからないが、丁度この頃、著述を再開したのが主著『迷える者の手引き』である。これは彼の弟子、ユダの子ヨセフ（Joseph ben Judah, 1160 頃-1226）がアレppoに旅立った 1185 年頃から、弟子に書き送った教えをまとめたものである。ヨセフは師と手紙のやり取りを通じて交流を保ち続けた³⁹。同じ時期に長男アブラハムが誕生⁴⁰、愛する弟ダビデを失った悲しみを乗り越え、彼は次代に伝えるべき教えを弟子に託したと考えられる。彼は『迷える者の手引き』を書き上げた後、『復活論』（*Ma'amar tehiyyat ha-metim*, 1191）と『占星術に関する書簡』（1194）の二つの短い論考と、アイユーブ朝の侍医として幾つか医学的論考を残した他は、晩年は健康を害したこともあり大著は記していない。最後までユダヤ人のラビとして、また医師として、ユダヤ人だけでなく多くの人々に仕えたマイモニデスは、1204 年 12 月 13 日、天に召されていった。キフティの記述によれば、彼の遺骸は遺言によってティベリアに葬られたという⁴¹。

3. 遍歴が著作に与えた影響 — 『イエメン書簡』より

3-1. 前文

『イエメン書簡』（*Iggeret Teman*）は、マイモニデスがタルムード学院長ヤコブ・ベン・ナタナエル（Jacob ben Nethanael）の求めに応じ、1172 年にイエメンのユダヤ共同体に書き送った手紙である。当時、彼はカイロでユダヤ人の首長の地位にあった。ヘブライ語で書かれた手紙の冒頭部分にはナタナエルへの敬意が記され、それに続き彼自身が経験したことが次のように綴られている。

私はスペインの賢者のうち最も小さい者の一人であり、祖国からの亡命の途上、身につけている飾りが取り去られた者（出エ 33:5）であります。寝る間も惜しんで学んで参りましたが、先祖が学んだことには未だ至っておりません。われわれは困難な時代に苦しんできました。静けさのうちに安らぐこともなく、疲れても憩いはなかった（哀歌 5:5）からです。町から町へ、国から国へと彷徨う者にとって、律法が明快なものに成り得ましようか。とはいえ、私は刈り入れをする人たちの後について落ち穂を拾い（ルツ 2:2, 7）、やせ細って干からびた穂を拒絶することなく、よく実の入った穂を集めてきました（創 41:22-23）。今、私は小屋で一息入れているところです（ルツ 2:7）。もし主が私たちの味方でなく（詩 124:1）、われわれの先祖たちが私たちに語り伝えたものがなかったならば、常に授かってきたものから、私は少しも集めることはなかったでしょう⁴²。

この箇所から、彼が故郷のコルドバを発って以来、一時も安らぐことなくアンダルスから北アフリカに至る亡命生活を続け、それでも先祖から受け継いだ教えを寝る間も惜しんで学んできたこと、そしてようやく、エジプトのフスタートで安定した生活を送っていることに安堵の思いでいることが窺える。

前文の最後には「(この手紙を) 走りながらでも読めるよう」(ハバ 2:2)、「子供や女性を含めた共同体のすべての人がこの問題について理解するように」とあり、共同体の全員に伝えたいという強い思いが表れている。

3-2. 本文

本文の冒頭では、ナタナエルの手紙にあった、共同体が抱える問題を次のようにまとめている。

ベルベル人がマグリブでしたことと同様、征服したすべての場所で、イスラエルの民が背教するよう強要することで彼らに強制改宗を命じた、イエメンのこの暴徒の問題につきあなたが伝えた内容は、われわれを落胆させ、共同体のすべての者に衝撃を与えたが、それは当然のことなのだ。これは凶報であって、それを聞く者は皆、両方の耳が鳴るであろう(サム上 3:11、列王下 21:12)。イスラエルは挟み撃ちに合い(ヨシュ 8:22)、西と東の両方の彼方での強制改宗という、われわれに降りかかったこれらの大問題のため心はやつれ、精神は混乱し、力は行き詰った。このような試練と警鐘の時について、預言者はわれわれのために祈り、取り成し、こう語っている。「わたしは言った。『主なる神よ、どうかやめてください。ヤコブはどうして立つことができるでしょう。彼は小さいものです』」(アモ 7:5)⁴³。

「ベルベル人がマグリブでしたこと」とは、彼自身がフェズ滞在中に被った強制改宗の体験のことを指していよう。彼自身、ムスリムとして生活するよう強制され、差別的な服装を強要され、シナゴグの破壊を見てきたのである。

当時イエメンは、バグダードを首都としたアッバース朝(749-1258)の支配下にあった。イエメンはアッバース朝の首都から遠いこともあり、反乱が絶えず起きていた。アッバース朝はスンナ派であったが、イエメン人はファーティマ朝の基盤であるシーア派分派のイスマール派と、隠れイマームを否定するシーア派分派のザイド派が多かったからである。1150年にアリー・イブン・アル＝マフディー(‘Alī ibn al-Mahdī)がアッバース朝に公然と反抗し、人々に悔い改めて禁欲的生活を送るよう説いて回ったことが契機となり、マフディー(救世主)運動が起こった。彼の息子、アブダル・ナビー(‘Abd al-Nabī ibn Alī ibn al-Mahdī)が

父の後を継ぎ運動の主導者となったが、この彼が「イエメンのこの暴徒」であろう⁴⁴。彼がイスラームへの改宗をユダヤ教徒に強制したことでイエメンのユダヤ人共同体は恐怖に陥り、エジプトの共同体はイエメンでの迫害を聞き混乱と絶望に陥った。マイモニデスが引用したアモスの祈りは彼自身の祈りでもあっただろう。彼は迫害に関し、次のように述べている。

アマレク、シセラ、セナケリブ、ネブカドネザル、ティトウス、ハドリアヌス、そして同種の他の者と同様、すべての王、暴君、敵対者、あるいは暴力的な征服者が、暴力と軍事力によりわれわれの法を破壊し、われわれの宗教を無きものとするのを、彼の目的かつ第一の関心事としたのである。これが神の意志を覆そうとする第一の部類である。第二の部類は、シリア人、ペルシア人、ギリシア人のような、最も賢く、最も学のある国々から成っている。彼らもまた、彼らが生み出した議論と、彼らが作り上げた論争により法を破壊し、無効にすることを望んでいる。征服者が刀により成したように、彼らは彼らの組成したもので法を無きものとし、その効力を消し去ろうとしているのである⁴⁵。

マイモニデスは、イスラエルの民が歴史上体験してきた様々な圧政を取り上げ、彼らが現在被っているイスラーム王朝による迫害は、過去にあった武力による迫害とは異なり、言論による迫害だと論じている。彼が言及している新アッシリア帝国 (c. 911 BC-612 BC) のセナケリブや、新バビロニア (626 BC-539 BC) のネブカドネザルなどによる、過去イスラエルの民が経験した武力による圧政は、神により終焉させられると預言書にあると、彼は『迷える者の手引き』第 2 部 29 章で述べている⁴⁶。注目すべき点は、彼がシリア人、ペルシア人、ギリシア人の三つを取り上げていることである。アケメネス朝ペルシア (c. 525 BC-330 BC) の滅亡はハガイ書 (2:6-7) に予期されていると彼は『手引き』の同箇所述べているが、ここで言うペルシア人とは違いただろう。この書簡が、イスラーム王朝の興亡が絡んだ圧政につき書かれていることを考慮すると、スンナ派の教義確立に貢献したアシュアリー派のガザーリーを指すと推測することもできよう。彼はシリア人とギリシア人に関して『手引き』第 1 部 71 章で触れているが、そこで彼はイスラームの正統神学であるアシュアリー派と理性的推論を基盤としたムウタズィラ派の教義は、哲学者に対抗して書かれたギリシア人のピロポノス (John Philoponus, c.490-570) や、シリア人のイブン・アディー (Ibn 'Adī, 893-974) らキリスト教徒の書物を基盤にしたものであり、彼らの議論は論証に基づいたものではないと主張している⁴⁷。重要なことは、イエメンでのユダヤ人に対する迫害は、

ムスリム間の思想的対立が根底にあると彼が暗に指摘していることである。教派間の思想的対立や、為政者と民衆との思想的乖離状態こそが、迫害の根底を成す原因であると捉えたと推測される。イスラーム王朝の歴史が、思想的対立を背景にした紛争の歴史でもあり、その歴史の狭間でユダヤ人が迫害を被ってきたことを、マイモニデスは悲壮な思いで受け止めていたと考えられよう。

4. おわりに

マイモニデスの生まれ育ったスペイン南部のアンダルスは、当時イスラーム文明の黄金期を謳歌していた。自由闊達な雰囲気の中で学んだ彼は最先端の学問を吸収し、希望に燃えた若者であっただろう。しかし、アンダルスはムラービト朝からムワッヒド朝の支配下に代わり、迫害を受けたユダヤ人は四方に散り散りにされた。マイモニデス一家は海を渡って北アフリカに逃れたものの、そこも終の棲家とは成り得なかった。それでも学び続けた彼はフェズで医学を習得、後に当時最も有名な医者 of 一人となる。

このような激動の時代の中、エジプトのフスタートに定住する 30 歳頃になるまで、彼の心は休まることはなかっただろう。彼は 1171 年にユダヤ人の首長に就任、この最も充実した時期に執筆したのが代表作『ミシュネー・トーラー』である。その後、愛する弟のダビデを海難事故で失い、彼の創作活動は完全に止まってしまふ。弟の死から立ち直り、ようやく書き始めたのが主著『迷える者の手引き』である。ユダヤ人だけでなく、キリスト教のスコラ学者にも影響を与えたこの著作は、あるいは弟の死がなければ現在のような深みある作品にはならなかったとも考えられる。

マイモニデスは古典ギリシアやイスラームの思想家から学び、柔軟に周辺文化を吸収し、そうした知識が彼の著作に影響を与えたことが窺える。しかし、思想的対立が政治的闘争を生み出し、果ては同胞が迫害に巻き込まれる状況を見て、論証を基盤とせず、教義を護ることを目的とした神学の危険性を彼は見抜いたのであろう。今回取り上げた『イエメン書簡』は、彼のそうした思想の一端でしかない。今後は、彼がキリスト教とイスラームの護教的神学から何を感じ、それが彼自身の思想にどう影響したのかにつきさらに検証していきたい。

註

¹ 多くの文献はマイモニデスの生年を 1135 年としているが、これは孫のダビデの記述に

- 基づくものである。クレーマーは『ミシュナー註解』の奥付に 1168 年完とあることと、マイモニデス自身がこれを 23 歳の時に書き始め、30 歳の時に書き上げたことと記していることで彼の生年を 1138 年とし、ディビッドソンもこれを支持していることから、ここでは 1138 年とした (J. L. Kraemer. (2008). *Maimonides: The Life and World of One of Civilization's Greatest Minds*. New York: Doubleday Religion, pp. 23-24; H. A. Davidson. (2005). *Moses Maimonides: The Man and His Works*. New York: Oxford University Press, pp. 6-9)。彼の生涯の多くは、彼自身が書いた著書や手紙によって知ることができる (Davidson, *op. cit.*, p. 4)。
- ² N. A. Stillman. (1979). *The Jews of Arab Lands: A History and Source Book*. Philadelphia: The Jewish Publication Society of America, pp. 40-41.
- ³ ヴァイキングは基本的に征服後は現地に同化する政策をとったため、独自の文化はほとんど残らなかった。
- ⁴ M. R. Cohen. (1994). *Under Crescent and Cross: The Jews in the Middle Ages*. Princeton: Princeton University Press, pp. 166-167.
- ⁵ H. Slonimsky. (1964). 'Introduction.' in Judah Halevi. trans. H. Slonimsky. *The Kuzari*. New York: Schocken Books, pp. 17-31.
- ⁶ 中世のイベリア半島を中心に三つの一神教徒を取り巻く歴史については、シャルル=エマニュエル・デュフルク、芝修身・芝紘子訳『イスラーム治下のヨーロッパ：衝突と共存の歴史』(藤原書店、1997 年)を参照。
- ⁷ Kraemer, *op. cit.*, p. 24.
- ⁸ *Ibid.*, p. 26.
- ⁹ *Ibid.*, pp. 30-31. イベリア半島の宗教的寛容と不寛容の揺らぎについては、マリア・ロサ・メノカル、足立孝訳『寛容の文化：ムスリム、ユダヤ人、キリスト教徒の中世スペイン』(名古屋大学出版会、2005 年)を参照。
- ¹⁰ Kraemer, *op. cit.*, pp. 34-37. Davidson, *op. cit.*, pp. 10-12.
- ¹¹ Cohen, *op. cit.*, pp. 182-183; Kraemer, *op. cit.*, pp. 101-104. マイモニデスも『強制改宗に関する手紙』(*Iggret ha-Shemad*) の中で、父の考えを支持する弁明をしている。
- ¹² Kraemer, *op. cit.*, p. 38. 12 世紀の翻訳運動については、伊東俊太郎『近代科学の源流』(中公文庫、2007 年)を参照。
- ¹³ Kraemer, *op. cit.*, p. 43, pp. 59-60, pp. 65-68; Davidson, *op. cit.*, pp. 75-121. アラビア語への翻訳運動については、ディミトリ・グタス、山本啓二訳『ギリシア思想とアラビア文化：初期アッバース朝の翻訳運動』(勁草書房、2002 年)を参照。ディビッドソンは新プラトン主義の著作を直接読んだ証拠はないとしている (Davidson, *op. cit.*, p. 113)。
- ¹⁴ Kraemer, *op. cit.*, pp. 69-80; Davidson, *op. cit.*, p. 146.
- ¹⁵ イベリア半島とモロッコの距離は、最短で 14km である。
- ¹⁶ Kraemer, *op. cit.*, pp. 83-91.
- ¹⁷ *Ibid.*, p. 92. ただし、これまでのところそのような命令を記した文書は見つかっておらず (Davidson, *op. cit.*, pp. 15-16)、ムワッヒド朝下全域で常に強制改宗があったわけではないとディビッドソンは見ている (*Ibid.*, p. 27)。
- ¹⁸ ディビッドソンはアラビア語原典が存在しないことや、語法や論理構造の点からこれ

- は偽書であろうと見ている (Davidson, *op. cit.*, pp. 501-509)。
- ¹⁹ Kraemer, *op. cit.*, pp. 104-113. マイモニデス自身がイスラームに改宗したかについては諸説あるが、クレーマーは、彼はフェズで表面的にイスラームに改宗した後、アッコに移住したと推察している (*Ibid.*, pp. 116-124)。Davidson, *op. cit.*, pp. 17-20 を参照。
- ²⁰ アレクサンドリアに滞在してアッコへ向かったと考える方が経路的には自然だが、信頼できる史料はない (Davidson, *op. cit.*, pp.29-30)。
- ²¹ Kraemer, *op. cit.*, pp. 128-130.
- ²² *Ibid.*, pp. 132-133.
- ²³ *Ibid.*, pp. 127-128.
- ²⁴ *Ibid.*, pp. 135-137. ナフマニデス (Moses ben Nahman, 1194-1270) とは異なり、ユダヤ人にとってイスラエルの地への居住は義務で、救世主が現れる条件だとはマイモニデスは考えていなかった (*Ibid.*, p. 140)。
- ²⁵ *Ibid.*, pp. 139-140.
- ²⁶ 申命記 17:16 『あなたたちは二度とこの道に戻ってはならない』と主は言われた。』(新共同訳)
- ²⁷ Kraemer, *op. cit.*, p. 141.
- ²⁸ キリストの人性は神性に吸収され、本性は単一であるとする説。キリストの位格を二つと見るネストリウス派に抗するため出された説で、エジプトやシリアで主流の考え方であった。
- ²⁹ *Ibid.*, pp. 145-149.
- ³⁰ *Ibid.*, p. 255; Davidson, *op. cit.*, pp. 31-.32, n.113.
- ³¹ Kraemer, *op. cit.*, pp. 160-161. 英国のリチャード 1 世の侍医への招聘を断ったという説もあるが、ここではエルサレム王国の王と捉えた方が妥当であろう。
- ³² *Ibid.*, p. 190.
- ³³ ユダヤ人の首長 (Ra'is al-Yahud) は 11 世紀にエジプトで創設された職位で、ユダヤ共同体の長として社会の安定のため朝廷に協力する責務を負う (*Ibid.*, pp. 216-220)。確証は十分でないが、ストロームサは彼がその職位にあったと考えることは妥当と見ている (S. Stroumsa. (2012). *Maimonides in His World: Portrait of a Mediterranean Thinker*. Princeton and Oxford: Princeton University Press, p. 40)。一方、ディビッドソンは、マイモニデスの息子アブラハムがその職位にあったことは確かだが、彼自身がそうであったことは否定している (Davidson, *op. cit.*, pp. 54-64)。
- ³⁴ Kraemer, *op. cit.*, pp. 187-192, pp. 197-201.
- ³⁵ *Ibid.*, p. 215. ディビッドソンは、当時マイモニデスは『ミシュネー・トーラー』の執筆中だったため、侍医になったのは 1190 年以降と見ている (Davidson, *op. cit.*, pp. 35-37)。
- ³⁶ Kraemer, *op. cit.*, p. 446. マイモニデスの医学的著作は、泉彪之助「モーゼス・マイモニデスの医学的著作概観」、『日本医史学雑誌』47 (2) (2001), 283-307 頁を参照。
- ³⁷ Kraemer, *op. cit.*, pp. 230-232.
- ³⁸ *Ibid.*, pp. 254-257.
- ³⁹ *Ibid.*, pp. 359-363.

-
- ⁴⁰ *Ibid.*, p. 232. 結婚から10年以上たって長男が誕生しているため、結婚はもっと遅かったとする学者もいるが、弟子のヨセフに宛てた手紙から、クレーマーは娘が先に生れていた可能性も指摘している。一方、ディビッドソンは娘がいた確証はないとしている (Davidson, *op. cit.*, pp. 37-38)。
- ⁴¹ Kraemer, *op. cit.*, pp. 470-472.
- ⁴² Maimonides, trans. J. L. Kraemer. (2000). 'Epistle to Yemen.' in R. Lerner. ed. *Maimonides' Empire of Light*. Chicago and London: The University of Chicago Press, p. 101.
- ⁴³ *Ibid.*, pp. 101-102.
- ⁴⁴ Kraemer, *op. cit.*, pp. 234-235. アッバース朝のサラディンはこの運動を弾圧するため軍を派遣、1176年にアブダル・ナビーを処刑している。
- ⁴⁵ Maimonides, *Epistle to Yemen*, p. 103.
- ⁴⁶ Moses Maimonides. trans. S. Pines. (1963). *The Guide of the Perplexed*. Chicago and London: the University of Chicago Press, pp. 337-344.
- ⁴⁷ *Ibid.*, pp. 176-178.